
いにしへの幻想 - deep illution -

夢幻鳳雛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いにしへの幻想 d e e p i l l u s t r a t i o n

【Nコード】

N 2 1 3 6 N

【作者名】

夢幻鳳雛

【あらすじ】

ここ1ヶ月の間に、学校で発生する不条理な事件。突如現れた転校生。

そんな話を全く知らない不登校少年、柳生是親が不治の病にかかった妹、茉那を救う手掛かりがあるという異世界に迷い込む。

しかし、迷い込んだ異世界では幾多の試練が待ち構えていた。

p r e l u d e (前書き)

2 ページ目を除いて主人公視点で話をお送りします。
6 月中旬の出来事です。

prelude

「何故なんだ……」

人生80年と言われている。

戦国の世でも人の生命を50年と唄われた。

原始人の平均寿命でさえも、30年はある。

それなのになぜ……

なぜ、こんなことに……

「ごめんね。

お兄ちゃん、私ね……」

凶器にも似た残酷な言葉が紡がれる。

彼女に何も反応できず、そうか。としか言えない俺は……あまりにも無力だった。

ここは小さな港町。

朝は市場に人が溢れ、昼は喉かに過ぎて行き、夕刻には下校する学生達の声が絶えない平和な町。

南を海に面して漁港が広がり、町を東西に分割する位置に川が流れ

る。

港に近い町の中心部分はビルや大型マンションが建っており、港から北へと離れるに連れて徐々に建物が減っていき、代わりに田畑や自然が広がる。

町の北端には山脈が連なり、唯一、山脈に含まれないで北東部に孤立している小さな山は裏山と呼ばれ、古くから様々な禍々しい言い伝えが残されている為、誰も近づかない。

そんな町がいつものように夕刻へと差し掛かった梅雨時に、一人の少年が河川敷で座り込み、俯いていた。

ぽんつと不意に肩を叩かれ、少年は後ろを振り替える。

「よう。不登校野郎」

いつの間にか小太りの正義漢、海原智永が少年の脇に座り込んでいた。

そして、親友の少年に衝撃的とも言える話を始めた。

「今日はな、やーさん、君によい知らせがある。

学校に可憐なお嬢様が転校してきたんだ」

「転校生……か。

何でこんな微妙な時期に……」

「分からない。

だが、容姿端麗でとてもミステリアスな感じが漂った人だということとは分かる。

そして彼女は自己紹介で、こう告げただ」

直後、少女の声が会話に割り込んできた。

「私の名前は桜井稟。

欲望・願い・幻想、そういう類のものを現実にしたければ、私のところに来て。

すべて叶えてあげるから。」

二人が同時に振り返る。

「桜井、なぜ転校生のお前がこんな所にいる。」

「気まぐれよ。」

たまたま通りかかって私の噂が聞こえたから、割りこんだだけ。初めまして。

いや、久しぶりとも言うべきかしら……柳生是親君。私が転校生よ」

「待て。俺はお前なんて知らない」

「そう……。私の勘違いなのか、それとも貴方が忘れていただけなのかしら……」

貴方と私は初対面。そういうことにしてあげる」

「お前は何が言いたい。なぜ俺のもとに来た？」

「貴方が昔の知り合いに似ててね。困っているように見えたから助けてあげたいと思って声をかけてみたの。」

もう一度言う。私は人の望みを叶えることができる。

もし貴方が悩んでいるのならば、私ならば助けてあげられる」

「不治の病でも、治すことができるのか？」

「ええ。やろうと思えばできるわ。」

けれども、その願いを叶えるにはただ一つだけ、私の言う条件に従ってもらう必要があるの」

彼女の真剣な瞳を見る限り、願いを叶えることができるというのは

まやかしではないはずだ。

「本当かつ！？」

俺にできる限りのことだったら何でもやる。
条件とは何だ、説明してくれ」

「貴方一人だけで、今から私についてきて。
どう？簡単な条件でしょう」

俺は彼女についていった。

「さつき貴方が不治の病を直せるかと聞いたのには、きっとそれなりの理由があるはずね。
私が想像するに、妹が不治の病にかかったからではなくて？」

「正解だ。

偶然なのか必然なのか、何故お前はそんなことを的確に当てることが出来たのか、不思議だ」

「偶然よ。

学校を休んでまで落ち込んでいる、そして不治の病を直す方法がないかと私に聞く。

この二つの要素から貴方の身近な人が大病を抱えている、ということとが分かっただけ。

後は貴方がロリコンっぽい顔をしてたからね」

「ロリコンだと！？」

俺はな……クラス中の女子達から飽きる程イケメンと呼ばれるし、一年前には彼女だっていたんだぞ」

「ふられたんでしょ」

「うるせえっ」

と言った時、俺は彼女の話を持ち出したことを後悔していた。
なんせ俺の元彼女、遠野詩織は半年前に交通事故で亡くなったのだから。

そして、二人は裏山に入り、日は沈んだ。

「おいっ、ここって……」

「裏山よ。」

大丈夫。二度と出てこれないとかゾンビが出るとかいう禍々しい言い伝えは全部嘘」

「俺を連れてきて、何をするつもりだ!？」

「この裏山にはね。別世界に通じる扉があるの。」

別世界ではこの町と比べると100年程度発展していて、更にこの世界ではフィクションでしか実在しない魔法という概念が成立している。

だからこの町に帰った時には莫大な財産や、強大な力が手に入るの。つまり、どんな病でも治せる薬でも手に入れることが可能よ。

けれども別世界には一人だけでは入れない。

二人で一緒に入るの」

満月が頭上に登り、俺達は山頂に到着した。

山頂にはどう見ても、古びた井戸以外には何も無い。

これが別世界への扉だと言うのか。

そんなことを考えていると、いきなり耳をつんざくような銃声が聞

こえてきた。

俺は情景反射で横に飛んだ。

着地点が不幸にも、水に満たされた井戸の中であつた。

俺は井戸の中へと落ち、同時に意識も薄れていった。

p r e l u d e - a n o t h e r s i d e - (前書き)

今回は、主人公の親友、海原智永視点の話です。

prelude - another side -

俺は海原智永。

昔の漫画に出てくる人物の如く太い眉毛と角刈りに似た髪型を持ち合わせ、高校生なのにランドセルを常備している。

そのせいか「三河屋の智永」「板前ランドセル」等という数々の奇抜な仇名で呼ばれている。

是親の親友だ。

柳生是親——アイツには妹がいて、名を茉那という。

彼女が幼い頃から病弱で御人好しなせいか、この兄妹は羨ましいほど仲が良い。

というのは俺も妹を持っているが、妹はギャルで俺はヲタク。

互いに相性が合わない故か、支離滅裂な関係だ。

俺と彼女が知り合ったのは昨年 of 始業式。

家が近所なので、俺と是親は一緒に登校していたが、その時までは妹がいるなんて思ってもいなかった。

是親は自分の家の話を持ち出すことがなく、彼女の中学校は遠い町にある有名な私立の中高一貫校だった為、朝早くに登校して夜遅くに帰宅する。

つまり、遅刻ギリギリまで寝ている俺と顔を合わせる機会すらない。しかし、病弱で人付き合いが苦手なせいなのか執拗ないじめに合っ
て不登校に陥った為、内部進学を諦めた彼女は特待生として俺達の
高校へ入学した。

それから毎日三人で登校して昼は食堂で一緒にとり、果てにはバンドまで結成した。

いつも三人で馬鹿をやっていたせいか、入学仕立ての頃に印象深かった彼女の暗い顔にも、いつの間にか光が射して輝きを放っていた。

しかしそんな日常も、束の間の幸福だった。

去年の冬休みに衝撃的な事件が起きた。

是親の彼女、遠野詩織が交通事故で亡くなったのだ。

事件はデート中に起きたみたいだ。

不幸にも彼女の死に際を、アイツは間近で見てしまった。

その時からアイツは豹変した。

優等生、好青年、クラスの中心的存在としてもてはやされた以前とは打って変わって、今や暗い不登校少年に成り下がってしまったのだ。

悪い事は連鎖するものだろうか。

不運にも茉那が今年の春から不治の病に侵され、ずっと入院しているのだ。

それ以来、詩織が亡くなった影響で暗くなった性格が手の施しようもない程までに暗くなり、ずっとアイツは河川敷に佇みながら延々と座り込んでいる。

そういう訳で俺は毎日、学校が終わってから河川敷へと向かう。少しでも煩い事への相談役になったり学校のことを話したりして、アイツの気分を少しでも明るくしたいからだ。

そしてアイツには内緒にしているが、夜毎に茉那の見舞をする。

俺が見舞に行くと必ず彼女は煩い事を相談してくる。

是親の悩みは茉那の容態に関することが多いが、茉那の悩みは自分の病態のことではなくて是親に対する心配である。

全く、ここまで互いのことを思いやる兄妹なんてこの御時世ではマインリテイに違いない。

そんな感じで最近の俺は毎日を過ごしているが、ここ1ヶ月の間、学校で妙な事件が起きている。

数日に一度、何人かの生徒が行方不明になるのだ。

俺達の学校は1クラス40人、同学年で3クラス、40×3×3＝360人いる訳だが、俺のクラスでも10人は行方不明になった。

そのうち1割は 先週に裏山近くで見つかった。

しかし、見つかった人の半分は亡くなり、残りの半分は植物人間状態となり、病院に搬送されたらしい。

この事件の話は学校の生徒間とその関係者にしか伝わっていない。

さらに地域のニュースや新聞でも全く取り扱われていないのだから、奇妙な話である。

俺は柳生兄妹に対してこの事件の話を聞いて更なる悩みや心配事を増やさないようにと配慮している為、隠している。

いきなり転校生が現れた今日も、俺は是親に会いに河川敷へと向かった。

アイツにいつも通り話をしていたら転校生、桜井稟が急に割り込んで来たので驚いた。

しかし、彼女の口から裏山という言葉が出た時に俺は確信した。

桜井稟が学校での事件の首謀者であるのか、もしくは単なる馬鹿者だということ。

俺は走って家に帰り、改造モデルガンと包丁、そして財布をいつも着用しているランドセルに詰め、タクシーを呼んで裏山に向かった。俺は二人がうまい具合に山に入ろうとするのを見つけて尾行した。

日が沈んだ。

二人は山頂に着き、俺も木々の間に隠れながらも辛うじてたどり着

く。

俺は桜井が小型ナイフを隠し持っていることに気付いた。

このことに気付いていない是親の危機をいち早く察した俺は、改造モデルガンで威嚇射撃をして、彼女の気を反らすことに成功した。

しかし、是親は消えていた。

不意に声が聞こえてくる。

「ちっ、失敗したか……」

隠れていないで出てきなさい。

私に齒向かう少年、海原智永!!」

感づかれた。

俺は左手にモデルガンを、右手にナイフを装備して桜井の正面に姿を現す。

「何故、隠れているのが俺だと分かった!？」

そして、是親をどこにやった!？」

「それは、貴方が尾行していることを最初から知っていたからよ。ただ、野放し状態でも害はないと思ったから放っておいただけ。

是親君の事に関しては誤算だったわ。

どうやら一人で異世界に行ってしまったみたいね」

「ついさっき、二人で一緒に入らないと異世界には行けないと言ったのはお前のくせに、なぜそう断言する!？」

「本当に異世界に行く為には、血を流した人間が井戸を通過するだけで済むからよ。」

どうやら是親君は、貴方の銃弾を避ける時にかすり傷を負って井戸に転落したみたいね」

「そうか……」

なら、ごめん。

桜井が小型ナイフを隠し持っていただけで威嚇射撃をした俺を、許してくれ。

ところで、お前は何で転校生のくせに、なぜ裏山に関して詳しく知っている？」

「それは簡単ね。

私が魔導師で、異世界から来たからよ。

まあ、こんな話を信じるか信じないかは貴方の勝手だけれど」

「なら、学生が行方不明になる事件を知っているか？」

聞いた途端、気まずい雰囲気になった。

寸刻の沈黙が走る。

同時に、彼女から不気味なオーラが漂い始める。

俺は、パンドラの箱を開けたような気がして後悔した。

先に彼女が沈黙を破り、淡々と言葉を紡ぐ。

「知っているわ。

私も事件の首謀者の一人だから。

悩みを抱えている学生達の目の前に現れて、甘い話でこの山の中に引き込んで、異世界に誘い込んだのよ。

貴方だけに教えてあげる。

私が何故こんな事をするのかを」

彼女はそう言うと、いきなり俺の肩にナイフを突き立てた。底知れぬ恐怖のせいかな、俺は悲鳴さえもあげられなかった。

「誘拐した人間を、私は操り人形にするの。
そして、異世界で私の意のままに働かせて、使い物にならなくなつたら捨てて、新しい人形を補充する。」

私は柳生是親という人形を手に入れることは出来なかったけれども、代わりに貴方という人形をもらうわ」

「外道め……」

「いきなり銃を向けて、何をするつもり？

そんな震えた手で撃てる訳、無いじゃん。

それに私は魔法使いよ。

この程度のモデルガンなんて」

「黙れ。」

これは通常のモデルガンに改造を施してライフルと同じくらいの性能を持つ銃だ」

俺は銃をアイツの顔面に向けて一発撃った……はずだった。

驚いた。

瞬時にアイツは親指と人差し指だけで弾丸をつまむという常人では考えられない行動に及び、なおかつ無傷だったのだから。

どうやら俺は、恐ろしい魔物を敵に回してしまった。

「今度は私の番よ」

と、アイツは左手を俺の目の前に突きだし、呪文を唱え始めた。

それ以来、俺の意識は遠退いていった。

ここは何処だ……

俺は誰だ……

次に目を覚ました時、俺は全ての記憶を忘れていた。

お嬢様風の少女が話しかけてきた。

「貴方はこの世界の住人ではない。

異世界の王様よ。

さあ、今から私と異世界に行つて、柳生是親という迷える子羊を捕まえにいきましょう」

そう言われて何も分からぬまま、俺は彼女と共に井戸へ飛び込んだ。

ACT 1

気付いたら古びた建物の中にいた。

辺りを見回す。

眼前に広がるのは窓とドア、大きなゴミ箱以外に何もない寂寥とした空間。

窓を覗く。

一面に広がる銀世界。

ふいに我が目を疑う。

ついさっきまでいた世界は季節が春と夏の境界、即ち梅雨であったのだから。

もう一度外の景色を確認しても、やはりしんと雪が降っている。

その他にも窓を覗くという動作で2つの情報を得た。

ここがビルの30階以上の高い場所に当たること、建物の周りに沢山の高層ビルが密林の如く入り乱れていること。

突如、隣の部屋から銃声と悲鳴がハーモニーを織り成す。

どうやら異世界という場所は、物騒な所みたいだ。

危険をいち早く察知した俺は、ゴミ箱に身を隠す。

鈍い音を立てて扉が開く。

ガスマスクをつけた重装備の兵隊が二人、部屋に飛び込んできた。

「まさかとは思いが、このゴミ箱の中に敵が隠れている……なんて事はないよな……」

「あり得ないだろ。相手は圧倒的な兵力に任せて正面攻撃を繰り返すような連中だ。そんな奴等がゴミ箱に隠れてゲリラ戦を展開する必要はなかるう」

ゴミ箱に隠れている俺は、こいつらに敵と見なされるのか民間人と見なされるのかも分からない。

少なくともゴミ箱を開けられ、敵と認識された場合には必然的に「死」が待ちつける。

「取り敢えず、ゴミ箱を開けてみようぜ」

反射的に、下から蓋を抑えつけてしまった。

「おかしい。ゴミ箱が開かねえ。多分、誰かが中に入ってやがる」

感づかれた。

「ならばお前は全力で箱を開ける。開けた瞬間、俺が銃を撃ち込んでやる」

最悪の展開だ……。

俺の命に死の宣告が鳴り響く。

こうなったら仕方がない。

イチかバチかの賭けを試みよう。

ゴミ箱を開く奴の力が徐々に増し、俺の力では対抗できない程の強さで引っ張られ、ついに箱が3ミリ開く。

今だ。

俺は素早くゴミ箱から抜け出し、兵隊達の背後に回り込んで蓋を開けた方を抑え込む。

「この野郎……俺を人質にする気か」

何気ない喧嘩で偶然習得した不意打ち格闘術が、本当に成功するとは思ってもいなかった。

「ここはどこだ。」

俺は何も知らないし、何をやってもいない。

それなのに何故、俺を殺そうと銃を向ける？」

「そりや当たり前だ。」

ここは戦場。俺達は兵隊。しかもこのビルは敵の居城。

ならば、味方以外は全員敵に決まっているだろうが。さっさと人質を返せ。」

「あきれたものだ。民間人という概念すらないのか」

「そんな奴等はこのビルにいない。」

今回の作戦はビルに捕らえられた捕虜を助けることだが、大将からは捕虜以外は全員殺せと聞いているからな」

「おい、敵に作戦を喋っていいのかよ？早く俺を助けてくれ」

「おっと、口が滑ってしまった。けれども問題ない。コイツは今すぐ処分してやる……百発百中を誇る、サバイバルナイフでな！！」
兵隊が銃をしまい、突然ナイフを投げる。

眉間に飛んできた為、無意識に人質を放して尻餅をつく。
助かった……

「流石、情景反射だけは優れた野郎だ。俺様の投げナイフをかわすとは……だが、ここまでだ」

おしまいだ……

二人の兵隊に銃口を向けられ、対する俺は無防備状態。もう生き延びる術すらない。

「三分間待つてやる。その間に、懺悔でも済ましな」

暫くの沈黙が続く。

俺は目をつむる。

「時間だ。死ね」

俺は死を確信した。

しかし俺は死ななかった。

代わりに兵隊二人の悲鳴が聞こえ、俺は目を開けてみた。

驚いた。

小太りで顔馴染みの親友が目の前にいたのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2136n/>

いにしへの幻想 - deep illution -

2011年10月4日15時43分発行